

『検証 ナチスは「良いこと」もしたのか?』

小野寺拓也・田野大輔

岩波ブックレット／2023年7月／820円(税込)

※今回お二人の編集委員が同じ本を選びました。

筆者によると『「ナチスは良いこともした」』といった『斬新』な主張』に共感する者は少なくなく、そのような議論が「定期的に」繰り返されているとのこと。こうした状況に対し、過去の個々の事象を切り刻んで取り上げるのでは本質は見えず、歴史的文脈の中でナチスがを行ったことを捉えることが必要不可欠であると筆者は主張する。経済回復・労働者保護・家族支援・環境保護・保健などの諸政策について多面的に考察を加え、「ナチスの政策で肯定できることないすよ」との自身のツイートの正しさを証明しようとする意欲作である。

.....

ヒトラーやナチス、とりわけその諸政策について本来の意図を一つ一つ暴いていく。タイトルに「?」が付してあるように、決して「良いこと」をしたでは終わらない。もちろんそれは、歴史家が歴史研究の蓄積や成果をもとに「解釈」したうえで分析であり評価である。歴史総合や世界史探究の授業で生徒に意見や感想を求めるとき、私たち教育者は、歴史家の「解釈」を正しく汲み取らせる必要があり、その分析や評価をふまえたかたちで表明させなくてはならないのだ。そのため必読の書と言えよう。

『14歳から考えたい ナチ・ドイツ』

ジェーン・キャプラン著・藤井美佐子訳・熊野直樹 監修  
すばる舎／2023年8月／2,420円(税込)

著者はオックスフォード大学の教授。ナチの歴史の全容を、時系列に沿いつつテーマを設けて概説するもの。所々でドイツ語の意味や表現などを説明することで、当時のドイツの人々の意識や感覚に近づけるよう工夫されている。

『アジアを生きる』 姜尚中

集英社新書／2023年5月／990円(税込)

冷戦構造や地域の分断を超えて「東北アジア共同の家」構想を古くから唱える筆者のアジア論。一方的なアジア礼賛ではなく、アジアが有する大きな可能性をあくまでも冷静な目で捉え、鋭く分析する。

『「地理総合」とGIS教育—基礎・実践・評価—』

橋本雄一 編

古今書院／2023年10月／3,520円(税込)

地理総合が高等学校で必修化され、これまでの地理Aや地理Bの指導に慣れていた教員も、試行錯誤を繰り返して、よりよい授業を模索しながら現場で取り組んでいる。なかでもGIS(地理情報システム)に関しては、Google Earthなどに親しんできた世代にとってはハードルが低いかもしれないが、ICTに取り組み始めたばかりの教員にとっては非常にハードルの高い分野である。本書はGISの概念のみの説明に終始しているのではなく、アプリの紹介からそれらを使った授業実践事例、そして評価方法まで段階を追って明示されているところが他のGISに関する書物との違いである。巻末に本書内で紹介されたアプリ等の紹介ウェブサイトアクセスできるQRコード一覧が掲載されているのも非常にありがたい。GISは生徒の主体的な学びとの親和性も非常に高く、授業に使えるGISツールをぜひ本書より見つけていただきたい。

『考える日本史授業 5』 加藤公明

地歴社／2023年7月／2,750円(税込)

高校での日本史の討論授業で非常に有名な加藤公明氏による新刊である。本書で多くのページを割いているのは、大学での教員養成課程の講義録だ。講義では、小・中・高における様々な教師の授業実践記録を学生に読ませて、授業の成果と課題を書かせている。学生が書いた成果と課題は、おそらく多くの現場の教員も同じように考えるであろうものが並ぶ。それに対する加藤氏のコメントと、それを受けて学生が書いた意見と、その意見を分析して大学生が今まで受けてきた授業についての認識や歴史認識がどのようなものが述べられている。本書を読むことで授業実践記録の読み方が身につけられるし、優れた授業実践の紹介としても有用である。また、討論授業への疑問に対する加藤氏の回答という読み方もできる。さらに、子どもが考える授業を作り上げるために必要な条件も、その講義録に散りばめられている。授業実践記録の他にも、歴史学と歴史教育の関係や、歴史総合への提言も載る。